



| | |
|--------------|---|
| Title | アラビア語「発音」教育に寄せて |
| Author(s) | 仲尾, 周一郎 |
| Citation | 外国語教育のフロンティア. 2021, 4, p. 297-312 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/79380 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アラビア語「発音」教育に寄せて

Prolegomenon to Arabic pronunciation instruction

仲尾 周一郎

Abstract

The pronunciation of Modern Standard Arabic (MSA) is a less-discussed topic in the study of Arabic instruction. Although this is mainly because MSA has been traditionally taught as a written register, in the recent trend to teach MSA for oral communication, it is important to argue what and how to teach about its pronunciation.

This study addresses three common problems commonly found in major Arabic primers popular in Japanese universities: (1) less scientific description of the phonetic aspects of Arabic sounds, (2) orthography-centric explanation of sounds (e.g., negligence of the Advanced vs. Retreated Tongue Root feature for vowels and borrowed phonemes which lack special letters), (3) uncritical preference of the pronunciation by native speakers of specific colloquial dialects (usually Cairene or Levantine), despite the fact that Arabic has an established orthoepy (*tajwīd*) originally developed for Qur'ānic recitation, and (4) that, although the oral register of MSA has a number of peculiar morphophonological rules for 'pronouncing' (i.e., morphophonologically decoding) the written text (e.g., the retention of certain word-initial glottal stops, the omission of word-final case and indefiniteness markers, and the morphological ('state') alternation for feminine nouns), these rules has not been described or manualized for instruction.

After arguing what and how to teach about the articulations of Arabic sounds and describing the morphophonological features of the oral register of MSA, this study tentatively recommends (i) to teach the segmental phonetic articulation in accordance with the *tajwīd* rules on the one hand and (ii) to teach the oral morphophonology on the other, in order to achieve a scientific, region-neutral and oral communication-oriented 'pronunciation' of MSA at the cost of going slightly artificial.

キーワード：規範音、読音、母語話者信仰、オーラル・コミュニケーション

1. はじめに

これまで、学術的に信頼できる著者陣によって書かれ、かつ日本国内で一般に普及してきた教材を検討する限り、国内の正則アラビア語 (以後「正則語」) 教育において行われてきた「発音」指導には、4 点の課題が指摘できる。

第一に、音声学・音韻論分野の基本的な知見が十分実装されず、科学的とはいえない説明が再生産されてきた。例えば、国内最古のアラビア語教科書の一つである田中 (1963) は、*ل* を「眠っている人のいびきにこれに似た音を聞くことがあ[る]」としているが、同様の記述は今も大阪大学 (2019) など多くの教材で踏襲されている (2.1.1 節参照)。一般的な「いびき」は、少なくとも肺臓からの呼気による舌背と軟口蓋/口蓋垂の摩擦ではないため (一般的には鼻からの吸気による咽頭壁と軟口蓋/口蓋垂の顫動か)、不正確であるだけでなく、母語に存在しない音声実現に対する偏見を不用意に増長する恐れもある。また、やや微細な例として、ほぼ全ての教材で、*ل* は「英語の *l* と同じ」とされているが、英語 *l* には一般に ‘light/dark *l*’ と呼ばれる 2 つの環境異音があり、正則語もそれに似た 2 種の異音をもつが、それらの分布は両言語で大きく異なる。経験的に、日本人初級学習者の正則語発音において音節末の *ل* に英語 ‘dark *l*’ からの干渉が多く見られるが、これは両言語における異音の存在に対する意識づけが不十分であることを示唆している。

第二に、調音の説明に文字 (あるいは音素) 中心主義的な傾向がある。例えば、正則語の主要な母音 /a, i, u/ は、前/後舌素性により特徴づけられる 2 種の異音をもつ。これらの異音は、音素論的には「余剰的」だと解釈されているが、明瞭な正則語発音に有効であり、子音の調音点自体ではなく隣接母音の差異としたほうが、許容可能な発音が容易になる場合もある。しかし、ほとんどの教材ではこの言語事実への意識づけが十分行われていない。また、借用語に現れうる母音 /ē, ō/, 子音 /g, ċ, v, ž/ など是一切無視されてきた。

第三に、ある種の「母語話者信仰」により、特定地域の口語方言母語話者による調音を無批判に参照軸とする傾向がある。正則語は実際には「母語」としては獲得されていないにも関わらず、多くの教材で特定の (典型的にはカイロないしレバント地方の) アラビア語口語方言母語話者による正則語発音のサンプリング、さらに現代的規範・学習目標として適切であるとの主張 (e.g., Mitchell 1989) が行われることがある。しかし、正則語には 8 世紀の文法学者 *Sībawayh* の音声記述をもとにした、コーラン朗詠のための伝統的調音規範 (orthoepy) であるタジュウィード (*tajwīd*) が存在し、特に個々の分節音調音規範は歌唱などの世俗的領域でも影響力をもつ (Nelson 2008)。こうした地域中立的な規範の存在を無視し、恣意的に特定の地域の発音を優先することは謙虚な教育態度ではない。

第四に、オーラルな正則語に現れる非規範的な文・句・語境界での形態音韻現象が、参照可能な形で記述されることなく、教材に実装されている。例えば、*kitābun jadīdun* 「新しい本」は、伝統的には文・句末では /kitābun jadīdØ/ と実現することが規範とされる。これに対し、現在一般に普及している多くの音声教材 (e.g., Brustad et al. 2004; 本田 2001; 奴田原・榮谷 2003; 鷲見編 2019) では、/kitābØ jadīdØ/ のような、規範とは異なるが実際に用いられる、口語方言に類似した実現が採録されている。この口語風「発音」方式がどのような体系をなしているかは、これまで十分記述されていない。

本稿は音声学的に精密・科学的な記述あるいは網羅的な教材レビューではなく、日本の公教育における正則語発音の教育的規範を、明確な方針のもと人工的にデザインするため

の材料を整理することを目的とする。本稿では、現在日本国内で普及していると考えられ、教材用に意図的に録音された (つまり単なる自然発話の録音でない) 音声教材を含む初等教材のうち、特に本田 (2001)、奴田原・榮谷 (2003)、八木ほか (2013)、東京外国語大学 (2013-8)、大阪大学 (2019)、竹田 (2019)、鷺見編 (2019)、Brustad et al. (2004, 2010) を主な検討材料とする。

第 2 節では特に注意を要する分節音ごとに調音レベルでの規範と、それを正確に教えるための方法論について試験的に述べる。第 3 節では、文・句・語境界での形態音韻規則 (音韻調整) の実態を概観する。第 4 節では、以上に基づき科学的、多元主義的、かつオーラル・コミュニケーション志向型の「発音」教育のモデルとその可能性についてまとめる。

2. 調音 (文字と発音)

ハフス式コーラン朗詠のためのタジュウィード規範に基づき¹、日本語・英語に存在しない分節音に限って初等学習者にとって最適 (日本語母語話者かつ英語既修者にとって容易に調音可能、かつ広くアラビア語話者にとって明瞭に聴覚可能) な目標を提示する²。

2.1 子音

2.1.1 <ع> /k/, <ع̣> /g/

目標とする音声実現：一般的には口蓋垂摩擦音 [χ], [ʁ] とされるが、タジュウィード規範では「のどの最前」(‘*adnā ḥalq*) で調音されるとされ、後述の「舌の最奥」(‘*aqṣā lisān*) で調音される /q/ と対比される。一部の口語方言では軟口蓋摩擦音 [x], [ɣ] としての実現がみられることに鑑みて、国内外の教材にも「軟口蓋摩擦音」と記述するものも多い (Abboud et al. 1983, Ryding 2005, Mohamed・吉田 2014, 大阪大学 2019)。このため、少なくとも後部軟口蓋摩擦音 ([x], [ɣ]) としての実現は許容されるべきものだと考えられる³。ただし、タジュウィードでは隣接母音に後舌素性を与えると定義されるため、一部の音声・動画教材が採る [xa]~[xæ], [ya]~[yæ] のような実現はカイロ方言など一部の方言話者に特有の調音特徴であり、避けるべきである。なお、Brustad et al. (2010) 動画資料にみられるように、母音間以外 (特に語頭) ではそれぞれふるえ音 [ʁ̥], [ʁ̥] としても実現する。

適切でない説明の例：/k/ については「喉の上部を震わせて、うがいをするような音」(大阪大学 2019)、「いびきの音に似ています。のどと息がこすれて出す、かすれた音です」(竹田 2019)、「喉の奥をこすらせて出す k に近い摩擦音です」(奴田原・榮谷 2003)、/g/ については「いびきもしくはうがいの音」(大阪大学 2019)、「うがいをするときの「ガラガラ」の音」(竹田 2019) などの表現が散見される。先述のとおり、いびきの音ではないため、この点は明らかに不適切である。うがいをする際に産出されるのと同様のふるえ音としての実現は規範音としても存在するが (吉田 1999)、母音間では奇異であるため、あくまで摩擦音を目標としたほうがよい。また、咽頭壁以下の器官は調音に関わらないため、「のど」を意識させるべきではない。なお、本田 (2001)・八木ほか (2013)・東京外国語大学 (2013-8) など、「口蓋垂音」と記述しつつ、音声教材では (前舌母音を伴う) 軟口蓋音が収録されているという齟齬も見られ、音声学的には不正確である。

指導方法の例 (有声音の場合)：(口蓋垂音としての調音が難しい場合) 現代日本語では複合語「あさごはん」の「ご」は後部軟口蓋摩擦音 [ɣ] として実現しやすいため、破裂音 [g]

として実現しやすい「ごはん」の「ご」と対比しつつ学習者にこの調音を意識させる。この上で英語をモデルとして母音 [a] を続ければ、/gɑ/ の規範音として十分許容可能な [yɑ] が産出可能となる。前述の /ɪ/ などと対比させつつ、後舌母音を伴い [yɑ], [yi], [yu], [ɑy], [iy], [uy] のように練習する。口蓋垂・後部軟口蓋の別は本質的ではないと考えられるため、「後部舌背音 (後舌音)」のようにラベリングすることが勧められる。

2.1.2 <ح> /h/, <ع> /ʕ/

目標とする音声実現：規範的には咽頭摩擦音 [h], [ʕ] であり、これ以外の音素での代替は不可能である。後舌による狭窄を行うが、隣接母音に後舌素性 (2.2 節参照) を与えない。

適切でない説明の例：/h/ について「手を温めるために、喉の奥から「ハーッ」と息を吹きかける感じで発音する」(大阪大学 2019)、「冷たい手を温めるときに出す息「ハー」のような音です」(竹田 2019)、「寒い日にかじかんだ指を暖 [sic] めるために「ハーッ」と息を吹きかける感じで」(Mohamed・吉田 2014)、「寒いときに「ハー」と言いながら手に息を吹きかける時には、よくこの音が使われています」(東京外国語大学 2013-8)、「かじかんだ手を「ハーッ」と温めるときの音に似ています」(八木ほか 2013)、「咽頭の奥の方から発する無声音です。凍えた手に息をかけて温めるときの要領です」(奴田原・榮谷 2003) のような表現が広く見られるが、手を温めるなら口腔内に阻害のない /h/ の方が効率的であるため、適切な説明ではない。調音点について、/h/ について「喉の一番奥 (喉頭) [sic] を緊張させて」、/ʕ/ について「喉の一番奥を引き締めて強く発音される」(いずれも本田 2001) のように、のど/咽頭の「奥」という表現も散見されるが、Mohamed・吉田 (2014) も指摘する通り、咽頭摩擦音はのどの上部 (中咽頭)、喉頭より手前で調音されるため正確でない。なお、/ʕ/ に関して「のどからしぼり出す音」(竹田 2019)、「日本語の「ア」を喉の奥から出すようなつもりで発音」(東京外国語大学 2013-8)、「[...] 咽頭の奥の方を引き締めながら「ア」と声を出します」(奴田原・榮谷 2003)、「/h/に関して「咽頭をまわりの筋肉の力で締めてつくられる音 [...] 親指と人差し指でノドボトケより上の部分を左右から軽くつまむようにして「ハー」という」(Mohamed・吉田 2014) など、(中) 咽頭筋の収縮を異質な動きとして意識させるような説明も見られるが、これらの筋肉が非アラビア話者によっても日常的に (嚥下・嘔吐などに) 用いられることを意識させる説明の方が望ましい。

指導方法の例 (有声音の場合)：経験的には、唾などを一度嚥下した状態から極力ゆっくりと舌圧・咽頭圧を下げ、咽頭を広げながら母音を発音すると [ʕ] に似た子音が伴いやすい。この上で、前舌母音とともに [ʕa], [ʕi], [ʕu], [aʕ], [iʕ], [uʕ] のように練習する。

2.1.3 <ق> /q/

目標とする音声実現：先述のとおり、/q/ の調音点は規範的には 'aqṣā l-lisān「舌の最奥」とされており、大まかには後部軟口蓋破裂音ないし口蓋垂破裂音と考えられる。隣接母音には後舌素性を与える点で /k, g/ と共通する。ただし規範音では majhūr (無気) [qʰ] とされ、帯気音の /k/ [kʰ] とは峻別する必要がある ('Iyād 2016; Abboud et al. 1983)⁴。カイロ方言母語話者は、喉頭狭窄素性の弁別をもたず、/q/, /k/ いずれも弱い帯気を伴うことが多い (Heselwood 1996; Islam Today 2013)。この調音特徴は、Abboud et al. (1983) を除き一般的な正則語教材では一切記述されていないが、[qʰ] や [kʰ] などの実現は回避すべきである。

不適切な説明の例： /q/ について「のどの奥から出す q の音」(竹田 2019)、「ك (k) よりさらに咽頭の奥の部分で発音します」(奴田原・榮谷 2003) のような記述が散見される。/g/, /k/ と同様、のど (咽頭) は調音に関わらないため不正確である。「口蓋垂に舌の根元をつけていったん息をせき止めてから、勢いよく開放させ呼吸を破裂されて発音する」(東京外国語大学 2013-8) のように、帯気音かのような誤解を招く記述は避けるべきである。

指導方法の例： 口の前に薄紙を垂らしながら一旦英語 *ca(r)* を発音させ、紙が揺れるよう意識させる。その紙を揺らさないように [ka] と調音できれば、正則語 /qa/ の規範音として指導して問題ない。一方、英語 *ca(t)* を発音させ、紙が揺れるべきことを意識させられれば、ほぼそのまま正則語 /ka/ [k^ha] (~[k^hæ]) の規範音として指導できる。

2.1.4 <ص> /s/, <ض> /d/, <ط> /t/, <ظ> /d/

目標とする音声実現： 西洋や日本の正則語教育では伝統的に「強調音／強勢音」(emphatics) と呼び、タジュウィードで *'itbāq* (「皿 (*tabaq*) のようにすること」か) と呼ばれる、舌端以外の調音点に関する素性に焦点が当てられてきた。この素性はアラビア語研究・教材では咽頭化 (pharyngealization)、軟口蓋化 (velarization)、あるいは口蓋垂化音 (uvularization, 中野 1988; 東京外国語大学 2013-8) と呼ばれてきた。2.2 節で述べるように、隣接母音に後舌素性を与える点で、/k, g, q/ と自然類をなし、軟口蓋音 /k, g/ や咽頭音 /h, ʕ/ とは自然類をなさないことから前二者はラベリングとしてやや矛盾するため、「口蓋垂化」ないし「後部舌背化 (後舌化)」と呼んでおくことが勧められる。これに加え、円唇化や舌側面を正面からみて弧状に撓めるという特徴も明瞭に観察され (Brustad et al. 2010 動画教材)、アラビア語非母語話者の伝統的正則語読誦音では円唇化と解釈されることもある⁵。また /s, d, t/ については、/s, d, t/ と比べて舌尖の位置がやや反り上がる (Abboud et al. 1983; 田中 1963)⁶ が、経験的には学習者がこの点を過剰に意識すると反り舌音 [s̠, d̠, t̠] に近い調音を行うことがあるため、この点は強調すべきでない。タジュウィード規範的としては /d/ は何らかの側面音 (Mohamed・吉田 2014、恐らく近似的には [k̠^ʷ]) と記述され、実際に現代のコーラン朗詠でも一部の環境で側面摩擦音が現れることもある (吉田 1999)。しかし、その実態は十分記述がなく、現代の規範としては歯茎破裂音としておくのが妥当である。さらに、ほとんどの教材では触れられていないが、/t/ は /q/ と同様に無声無気音である (Abboud et al. 1983; 仲尾 2018; Nakao forthcoming; Islam Today 2013; 'Iyād 2016)。以上より、各々 [s^ʷ ~ s^{ʷʰ}], [d^ʷ ~ d^{ʷʰ}], [t^ʷ ~ t^{ʷʰ}], [ð^ʷ ~ ð^{ʷʰ}] を目標とすることが妥当だと考えられる。

適切でない説明の例： これらのうち、文字順で最初の /s/ について、「強勢音と呼ばれるアラビア語特有の4子音の一つ。これは s の強勢音。強勢音は、舌の根元を押し上げ緊張させながら、各音 (この文字では s 音) を発音する。その結果後続の母音 a, i, u は、それぞれ o に近い a, e に近い i, o に近い u に聞こえる」(大阪大学 2019)、「重い s の音。「ソ」の口で、サ、スイ、スと出すといいでしょう」(竹田 2019)、「س (s) の強調音。舌先を上歯の付け根辺りにつけ、舌の後部を押し上げるようにして舌の真中にくぼみを作り、「タ」と発音します」(奴田原・榮谷 2003) のような記述を行い、/t/, /d/, /d/ も同様の説明とされることが多いが、それぞれ記述に重きをおく点が異なっており、十分明瞭ではない⁷。

指導方法の例： 経験的には、「舌を皿のようにし、そこに液体を溜めたまま、こぼさないようそうっと /s/, /d/, /t/, /d/ を発音しなさい」のように指導を行えば、口蓋垂化／後舌化・

円唇化・舌側面の撓め (および /t/ の無気化) が達成されやすい。このうえで、後舌母音とともに練習を行う。同時に英語の ‘dark l’ の調音の仕方と似ていることについても意識させることが望ましい。これらを「咽頭化」子音とする Mohamed・吉田 (2014) は、咽頭摩擦音と同様に咽頭筋の収縮を意識させる説明を行っている。「強調・強勢」(‘emphatic’) や「重い」といった表現は、こうした咽頭筋の緊張・収縮を指し示すものと考えられるが、規範によって定義されていないことを考慮すれば、特段指導の必要はないと考えられる。

2.1.5 <ɾ> /r/

目標とする音声実現: 規範音としては *mukarrar* (ふるえ音) [r] であり、特に母音間以外では明瞭にふるえが聴覚される。一方、単子音 /r/ としては母音間での過剰なふるえは奇異であり、かつ明瞭なふるえ音である重子音 /rr/ [r:] との弁別が難しくなるため、単子音としては一般的な日本語の (非語頭の) 「ラ行」子音と同じ、はじき音 [r] (Abboud et al. 1983、東京外国語大学 2013-8、Mohamed・吉田 2014) と考えたほうがよい。コーラン朗詠においても、/r/ [r]・/rr/ [r:] などの実現が観察される (吉田 1999)。規範的には隣接する /a/, /u/ に対しては後舌素性を与え、/a/, /u/ に隣接する環境などで口蓋垂化音として調音される。

適切でない説明の例: 日本語での教材の多くで「巻き舌の r」という記述がみられる。「巻き舌」という俗称は、(反り舌音としての) 英語 /r/ [ɹ] を指すことがあり、曖昧であり学習者に混乱を招く恐れがあるため、一貫して「ふるえ音」という呼称を用いることが勧められる。本田 (2001) は接近音 [r/ɹ] と同一視しているようであるが適切とはいえない。

指導方法の例: ふるえ音については、経験的には、[r] の練習方法として一般に流布している「サッポロラーメン」を 1 秒で ([səp.r:a.məŋ] のような感じで) 発音せよ」というような指示が効果的である。正則語 /r/ については、環境異音・隣接母音について意識させつつ [r^(w)ɑ], [ri], [r^(w)u], [ɑr^(w)], [ir], [ur^(w)], [ɑr^(w)ɑ], [iri], [ur^(w)u] と練習させる。

2.1.6 <ʔ> /l/

目標とする音声実現: 基本的には環境に関わらず典型的な [l] であり、隣接母音に後舌素性を与えない。ただし、‘*allāh* (および ‘*allāhumma*) 「神」という語の /l/ についてのみ、その直前の母音が /a/, /u/ であれば後舌素性を与え、それ自体も口蓋垂化 (e.g., /ʔɑl^(w)ɑ:h/) するが、/i/ であればそうならない (e.g., /li-llāh/ [li:lɑ:h] 「神に」)。

適切でない説明の例: ほとんどの国内教材では「英語の /l/ と同じ音」として記述される。前述のとおり、環境異音を含めた英語の /l/ の音声実現と同一視されることに繋がるため、特に音節末での実現に留意した指導が必要である。

指導方法の例: 正則語 *fal-* (fa-li-) 「～しましょう」と英語 *pal*、正則語 *fūl* 「豆」と英語 *fool*、正則語 *fī l-milk* 「所有において」と英語 *fill milk* など、似た音配列の対比例を用いて、音節末での両言語での /l/ の音声実現の違いについて意識づけを行う。

2.1.7 <ɟ> /j/

目標とする音声実現: タジュウィードでは、/y/ [j], /s/ [ʃ] と同様「中舌」(*wasaf l-lisān*, おそらく硬口蓋に対応) で調音される、その他の破裂音と同じ素性 (*šadīd*) で特徴づけられる音声として定義される。この記述は字義的には上エジプト・スーダン・チャドなどで現在

観察される硬口蓋破裂音 [j] を指すと考えられるが⁸、コーラン朗詠を含め現在一般的／規範的とされる実現は (サウジアラビア以北のアラビア半島やイラクの諸方言で一般的な) 後部歯茎摩擦音 [d͡ʒ] である (吉田 1999)。ただし、調音点については日本語の一般的な (特に語頭の)「ジャ行」子音である歯茎硬口蓋摩擦音 [d͡ʒ] の方が明文的に示される規範音には近い。一方で、口語方言で語源的に対応する音素の音声実現のうち、[g] (カイロやアラビア半島南端部など) や [ʒ] (レバント地域・マグリブ諸地域など) などが正則語としても用いられることがあるが、明文的な規範からは明白に逸脱しているため目標とはすべきでない。

適切でない説明の例：国内外の多くの教材で「英語 j と同じ音」と記述され、特に問題はない。ただし、Brustad et al. (2010) 動画教材では、/j/ および後部歯茎摩擦音 /ʒ/ にアメリカ英語と似た円唇化が観察できるが、一般的だとは考えられない。東京外国語大学 (2013-8) や Mohamed・吉田 (2014) では、/j/ を「後部歯茎破裂音」として記述しつつ、音声教材では [ʒ] としての調音が録音されているなど、記述と実態に齟齬が見られる場合もある。「エジプトなどでは g の音で発音される」(本田 2001) のように (下) エジプト方言母語話者の発音のみについて注釈を行うことは、中立性の観点からは妥当とはいえない。

指導方法の例：特段指導の必要はない。ただし、(母音間で現れやすい摩擦音としての異音 [z] でなければ) 日本語ジャ行子音の発音や、アフリカ内陸部の発音の方が却って古風な規範に近いといえる。こうした事実はアラブ世界中心部の諸方言の「母語話者」による正則語発音への過剰な威信を和らげる効果があるため、あえて指摘する価値がある。

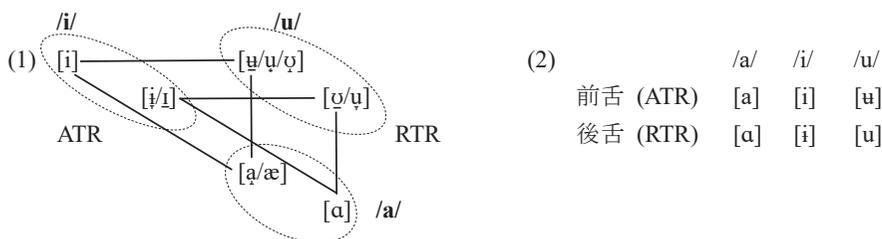
2.1.7 借用子音

以上に加え、タジュウィード規範には存在せず、文字表記習慣として安定していないが、現代語としては恐らく /ɖ/ [ɖ], /g/ [g], /ʒ/ [ʒ] /v/ [v] は借用子音と認めうる。このため、ほぼ全ての教材においてこれらの音素の存在は認められていない (e.g., Abboud et al. 1983) が、例えば /čād/「チャド」、/ʔingiliziyy/「英語」、/garāʒ/「ガレージ、自動車修理工場」、/vayrus/「ウイルス」などを一般的な文字表記に忠実に音韻解釈した場合、<تشاد> /tšād/ は基本的な音素配列の原則 (語頭子音連続の禁止) に対する例外、<انكليزي> /ʔinkiliziyy/ や <انجليزي> /ʔinjiliziyy/、<جارج> /jārāj/ や <كاراج> /kārāj/、<فيروس> /fayrūs/ は実態から乖離した「綴り字発音」となり、学習目標とすべきではない。教育現場では「これらは借用音 (借用音素) としては存在するが、それ専用の文字をもたない」と説明することが勧められる。

2.2 母音

ほぼ全ての正則語教材で、母音に関しては3種の音色 /a, i, u/ (および長短・二種の母音長) しか弁別されないことが記述されている。しかし、タジュウィードでは、各母音音素について概略 (1) ないし (2) のように示しうる、後舌素性 (*tafkīm*, retracted tongue root (RTR)) と前舌素性 (*tarqīq*, advanced tongue root (ATR)) と解釈できる素性が区別される⁹。

東京外国語大学 (2013-8) は、本稿で検討する中では母音について最も詳細な説明を行う教材であるが、前舌の /u/ を [u], 後舌の /u/ を [ʊ] と表記している。実際、前舌母音は狭め、後舌母音は広めに実現する傾向はあるが、IPA の定義上、前／後舌素性の現れに対しこの表記は逆となる。このため本稿ではとりあえず (2) のように簡略表記することとする。



タジュウィード規範としては、後舌母音が現れるのは、主として 2.1 節で前述した口蓋垂音 (/k/, /g/, /q/)・口蓋垂化音 (/s/, /d/, /t/, /ḍ/) の直後、ないしその子音が音節末子音であればその直前に限られる。これに加え、前述のとおり /r/ と 'allāh(umma) の /l/ は、隣接の /a/, /u/ を後舌化しそれ自体も口蓋垂化する。これらの現れはタジュウィードでは随意的/余剰的 ('āriḍa) とされるが、コーラン朗詠では広く用いられており、明瞭な弁別に役立つため、発音教育に導入することは有意義である。例えば /kāl/ [kʰa:l] 「量った」 vs. /qāl/ [kʰa:l] 「言った」は、簡略的に [kʰa:l] vs. [ka:l] と指導することもできる (同様に /kīl/ [kʰi:l(a)] 「量られた」 vs. /qīl/ [ki:l(a)] 「言われた」、/kul/ [kʰul] 「食べよ」 vs. /qul/ [kul] 「言え」)¹⁰。

隣接母音を後舌化する子音 (/k/, /g/, /q/, /s/, /d/, /t/, /ḍ/) はタジュウィードでは「上昇子音」(musta'liya) と呼ばれ、自然類をなすと認識されている。前述のとおり、いわゆる「強調音」については、「咽頭化」・「軟口蓋化」などの素性が普及しているが、軟口蓋音 /k/, /g/ や軟口蓋での同時調音をもつ /w/, 咽頭摩擦音 /h, ʕ/ は「上昇子音」には含まれない (隣接母音を後舌化しない) ため、こうしたラベル付けは混乱のもととなりうる。

国内外の一般的な教材はほぼ全て母音の実現について十分記述しておらず、最小対による母音音素 /a, i, u/ の弁別練習を含む奴田原・榮谷 (2003) や Mohamed・吉田 (2014) においても、子音環境を変えた環境異音の指導は想定されていない。また、先述の通り /k, g/ については、一般的な音声教材で規範と異なる発音が収録されている場合が多い。カイロ方言と同様に、音声の一部で前舌の /a/ が [æ] (語末音節核母音として [ɐ]), 前後舌を問わず /i/ が [i], /u/ が [u] として現れている教材も存在している。

その他、口語諸方言や現代正則語では借用音素として /e, ɛ, o, ɔ/ もある程度安定的に現れる (e.g., jaketta/jakitta 「ジャケット」、sikirtēr 「秘書」、folklor/fulklor 「民俗」、bitrōl 「石油」) が、教科書類では一般的に存在が認められてない (e.g., Abboud et al. 1983)。

2.3 アクセント

規範的定義は存在せず、従来の教科書類でも特段触れられていないか、地域的変異が大きいことが触れられるにとどまる (特に Mitchell 1989)。例外的に、八木ほか (2013) は、いわゆる「ラテン語アクセント規則」、つまり語末特殊拍を韻律外 (extrametrical) とし、語末から 3 番目の (antepenult) の拍を含む音節へのアクセント付与について述べている。この規則は日本語にみられる外来語アクセント規則とも類似し、正の転移が期待できるため、特段の教育上の指導は不要と考えても差し支えない。ただし、<فتاة> /fatā(h)/ 「女兒」 (cf. <فتى> /fātā/ 「男兒」) など <لة> /-ātVn/ 型の語尾をもつ語の休止形 (3 節参照) や、双数形・複数形接尾辞の構成形 ('construct state') /-ā/, /-ay/, /-ī/, /-ū/¹¹ などはこの規則に反したアクセントをもつことがある。今後、記述的な研究を経て指導方法を考案する必要がある。

ただし、上記の規則は、ほぼレバント方言のものと共通しており、特にエジプトや北アフリカの諸方言とは大きく異なるため、地域的に中立的とはいえるかどうかはやや議論の余地がある。Abboud et al. (1983) などは、重音節がなければ語頭音節がアクセントをもつ、という規則を記述しているが (cf. 中野 1988)、経験的には一般的であるとはいいいにくく、それを規範とする根拠も不明である。カイロ方言話者に顕著な /jāmi'a/ 「大学」、/madrāsa/ 「学校」、/mutarjīman/ 「通訳として」、/yalbīsū/ 「彼らが着る」、/ummū-hā/ 「彼女の母」、/katabtū-hu/ 「私はそれを書いた」、などのアクセント実現 (antepenult が長音節なら penult の短音節がアクセントをもつ) は、規範が存在しない以上「逸脱」とはいえないので矯正の対象とする必要はないが、少なくとも積極的に目標とすべき音声実現ともいえない。

3. 文・句・語境界における音韻調整

正則語では文・句・語境界における特定の形態素ないし音韻環境について、基底とは異なる表層形が現れる。本稿では仮にこの現象を「音韻調整」と呼ぶ。ただし、これに関して古典文法によって定義されてきた規範 (以下では Wright 1967 に基づく) と世俗的場面で使用される正則語の (口語方言との構造的類似を見せる) 実態には乖離がある。後者に関する現象の一部は「略式休止形 (informal pause form)」(Ryding 2005: 35) などと呼ばれ、多くの正則語音声教材でも部分的に採用されているが、そのシステムは十分記述されていない¹²。例えば、語尾に関する音韻調節である「休止形」(‘pausal form’, 語末 /V(n)/ の削除など) に関する規則は、コーラン朗詠などの規範では文・句末でのみ適用されるが、後者ではこれに類似する形式が文・句末以外にも現れること、およびデフォルトの形式 (「完全形」‘full form’) でも「休止形」でもない第三の形式が現れることがある。なお、Fujii (2011) は公共放送等で用いられる、僅かに規範から逸脱した「音読」方法に範を採った ‘broadcast reading’ を整理しているが、あくまで正則語テキストの「音読」方式の提示を目標とし、基本的には休止位置における現象のみを扱っている (現代的な「休止形」を再定義することを主眼としている) 点で、以下で紹介する教材での実態と比して穏健である。

本節では、現時点で十分経験的なデータが収集できていない構造を含め、教育場面で実装されている逸脱の実態 (「口語風発音」) の概略を明示し¹³、これをもって基本的な方針を提案に代える¹⁴。

3.1 定冠詞以外の語頭挿入音 /V/

規範 : 伝統文法では *hamzat l-waṣl* や *'alifl-waṣl* などと呼ばれ、現代音韻論的には基底の語頭子音連続に対し、母音およびデフォルトの語頭子音としての声門閉鎖音が挿入されたものと解釈される (仲尾 2019)。伝統文法では、この表層の /V/ (V は /i/ か /u/) は、文頭・句頭以外で削除される (e.g., *kataba 'isma-hu* → /kataba Øsma-hu/ 「彼は名前を書いた」) と解釈される¹⁵。これに伴い、直前の語の末尾が長母音の場合は短母音 (e.g., *mā 'ismu-hu* /ma Øsmu-hu/ 「彼の名は何か」) となり、子音の場合には母音挿入され (e.g., *katabat 'isma-hā* /katabatī Øsma-hā/ 「彼女は名前を書いた」)、表層的に超重音節の出現が回避される。

口語風発音 : *mā 'ismu-hā?* /mā 'ismu-hā/ 「彼女の名は何か」(B1-2)、*wa-'ismu-hu fu'ādun* /wa-'ismu-hu fu'ād/ 「なお彼の名はフアードである」(B1-3) のように、/V/ は削除されない。

3.2 定冠詞 /ʾal/ (ʾaC/) <ال>

規範: 先述の /ʾV/ と同様、形態素初頭の /ʾa/ は文頭・句頭以外では削除される。同様に、これに伴い直前の語末が長母音であった場合は短母音に、子音であった場合には母音が挿入される。形態素末の /l/ は舌尖音 (/t, t̪, d, d̪, r, z, s, š, s̪, d, t̪, ɖ, l, n/) の直前で逆行同化する。挿入音 /ʾV/ をもつ語が後続する場合は直後に母音が挿入され /ʾ(a)li-/ となる (かつ後続する /ʾV/ は削除される)。結果的に、この形態素は /ʾal/, /ʾaC/, /ʾali/, /l/, /C/, /li/ の 6 種の表層形をもつ。ʾallāh(umma) 「神」の語頭要素もこれに準じる。

口語風発音: ʾibn-ī ʾal-wahīdu /ibn-ī ʾal-wahīd/ 「私の独り子」(B1-3) のような例も見られるが、規範どおりの ʾibn-ī ʾal-kabīru /ʾibn-i Øl-kabīr/ 「私の長男」(B1-3) に対して稀である。ただし多くの場合、šaffun ʾibtidāʾiyyun fī ʾal-luġati /šaff ʾibtidāʾiyy fī Øl-luġa/ 「初級語学クラス」(B1-4)、kuntu ʾarġabu fī ʾal-ʾintihāʾi /kuntu ʾarġab fī Øl-ʾintihāʾi/ 「私は終わることを望んでいた」(B1-13) のように、3.1 の /ʾV/ は削除されないが、定冠詞の /ʾa/ は削除される。

3.3 強変化名詞・形容詞屈折語尾 -V(-n)・女性複数語尾 -āt-Vn <ات>

規範: 強変化 (基底語幹末の子音が /w/, /y/ 以外のもの、語尾 <ا> /-at-/ をもたないもの) の名詞・形容詞類には、非限定形式の屈折語尾により三段変化・二段変化の 2 つの屈折グループが区別される。非限定屈折語尾は、三段変化で主格 -un、属格 -in、対格 -an、二段変化で主格 -u、属・対格 -a である。限定屈折語尾はいずれも主格 -u、属格 -i、対格 -a となる。女性複数語尾 -āt- に関しては限定屈折語尾が主格 -un、属・対格 -in、非限定屈折語尾が主格 -u、属・対格 -i となる。句・文末では三段変化非限定対格 -an¹⁶ のみ /ā/ となり、その他の屈折語尾は削除される。これらの形式は「休止形」(‘pausal form’) と呼ばれる。なお、上記の -Vn は 3.1 /ʾV/ か 3.2 /ʾal/ が後続する場合、母音挿入により -Vni となる。

口語風発音: wālid-ī rajulun ṭayyibun /wālid-ī rajulØ ṭayyibØ/ 「私の父は善い人間だ」(B1-1)、ʾaṭ-ṭullābu yadrusūna ʾarbaʾa sanawātīn fī ʾal-jāmiʾati li-l-ḥuṣūli ʾalā bakālōriyūs ʾaṭ-ṭullābØ yadrusūn ʾarbaʾØ sanawātØ fī l-jāmiʾa li-l-ḥuṣūlØ ʾalā bakālōriyūs/ 「学生らは学士号取得のため 4 年間学ぶ」(B1-6) のように、明瞭なポーズの有無に関わらず基本的に休止形のみが用いられる。ʾaṣ-šaffu ʾal-ʾawwalu /ʾaṣ-šaff[ə] Øl-ʾawwal/ 「最初のクラス」(B1-3) のように、定冠詞直前で休止形が用いられる場合は挿入母音 (ここでは [ə] と表記するが、話者により [i] や [e] などの音声実現がありうる) が現れ、後続子音と音節を形成する (e.g., /...šaf.fəl.ʾaw.wal/; cf. Ryding 2005: 35)。以上については、共時的には格語尾をもたない口語諸方言の名詞・形容詞類の形態音韻論的ふるまいと並行的である。ただし、例えばカイロ方言 (以下では Mitchell 1978 に基づく; 表記は著者改変) ではいわゆる関係形容詞 (nisba) 男性単数形 -i は maṣr-i 「エジプトの」(cf. maṣr 「エジプト」) のようにアクセントを担わないが、正則語の口語風発音では /miṣr-iyy/ ([misʾri:(j)]) 「エジプトの」のようにアクセントを担う。

接尾代名詞のホストは, yaqḏūna waqta-hum maʾa ʾal-ʾāʾilati ʾal-kabīrati /yaqḏūna waqta-hum maʾa l-ʾāʾila l-kabīra/ 「大家族で時間を過ごす」(B1-12) のように休止形が用いられない。教材中の実例は未見だが、不定を表す mā もこれに準じる (Abdelrahman Elsharqawy, p.c.; e.g., yawman mā */yawmØ mā/ 「ある日」、fī waqtīn mā */fī waqtØ mā/ 「ある日」)。つまり、前接語 (enclitic) の直後では格語尾が保持される、と一般化可能である。ただし、(口語経由の) 借用語について、ʾan talbasū jakettāi(?) -kum /ʾan talbasū jakettātØ -kum/ 「ジャケットを着るこ

と」(B1-17) のような例も確認できる。また、対格／副詞語尾 *-an* は、*laysa kabīran wa-laysa bi-hi ḥammāmu sibāḥatin* /laysa kabīran wa-laysa bi-hi ḥammām sibāḥa/ 「[我家は] 大きくなく、プールもない」(B1-14)、*wālid-ī mašgūlun dā'imān* /wālid-ī mašgūl dā'imān/ 「我父はいつも忙しい」(B1-2) のように削除されない場合が目立つが、*wālid-ī ya'malu muwaḍḍafan fī maktabin kabīrin* /wālid-ī ya'mal muwaḍḍafØ fī maktab kabīr/ 「父は大きな事務所の職員をしている」(B1-2)、*'aṣbaḥa rā'ijan 'al-'āna* /'aṣbaḥa rā'ij[ə] Øl-'ān/ 「流行っている」(驚見編 2019: 43) など休止形が用いられる場合もある。副詞語尾としてはこの限りでなく、*jiddan* /jiddan/ 「とても」は */jidd/, */jiddā/ のような実現は見られない。Fujii (2011) も指摘するとおり、指示詞的な意味をもつ語尾 *-idīn* をもつ少数の時間副詞 *'inda-'idīn*, *hīna-'idīn* 「その時に」などもこれに準じ、語源的属格語尾 *-in* は削除されない (i.e., */'inda-'idØ/, */hīna-'idØ/).

3.4 名詞・形容詞屈折語尾 *-a/āt-V(n) <(L)>*

規範：名詞・形容詞女性単数形などに典型的に現れる語尾 *-at(-V-n) <(L)>* (弱子音語根を含む形態素の場合は *-āt(-V-n) <(L)>*) は、強変化屈折と同様の格語尾をもつ。ただし、休止形としては *-at* ではなく *-ah/-āh* (あるいはやや世俗的発音としては *-a*) となる¹⁷。

口語風発音：*minṭaqaṭun jamīlatun* /minṭaqaØ jamīlaØ/ 「美しい地区」(B1-1)、*'aḥsanu min ḥayātīn fī 'al-ḡurbati* /'aḥsan min ḥayāØ fī l-ḡurbaØ/ 「異郷暮らしより良い」(B1-13) のように、常に休止形 *-a/-ā* が用いられる (*-ah/-āh* は用いられない)。*'ilā 'al-luḡati 'al-'arabiyyati* /'ila l-luḡaØ l-'arabiyyaØ/ 「アラビア語に」(B1-2)、*fī 'al-madrasati 'al-'ibtidā'iyyati* /fi l-madrasaØ l-'ibtidā'iyyaØ/ 「小学校で」(B1-4) のように、語尾 *-a* は定冠詞 *l-* (C-) と音節を再形成 (再音節化) する (/...lu.ḡal.'a.ra.bi.ya/, /mad.ra.sal.'ib.ti.dā.'iy.ya/)。音声教材としての実例は未見であるが、語尾 *-ā* については *'al-ḥayātu 'al-jadīdatu* /'al-ḥayāØ l-jadīda/, */'al-ḥaya l-jadīda/ 「新生活」のように定冠詞直前での短母音化は生じない (Abdelrahman Elsharqawy, p.c.)。また、*'aktubu risālatan 'ilā 'ibn 'amm-ī* /'aktub risālaØ 'ilā 'ibn 'amm-ī/ 「私は従兄／弟に手紙を認めている」(B1-4)、*kānat ziyāratān qaṣīratān jiddan* /kānat ziyāraØ qaṣīraØ jiddan/ 「とても短い滞在だった」(B1-12) のように対格 *-an* も現れにくい。前接語の直前では *'an tajī'a wālidatu-nā* /'an tajī' wālidatu-nā/ 「我らの母が来ること」(B1-12) のように格語尾が現れる。

一方、構成形となる場合、*min madīnati ṭanṭā* /min madīnatØ ṭanṭā/ 「タンタ市から」(B1-1)、*ṭalāṭatu 'ayyāmin faqat* /ṭalāṭatØ 'ayyām faqat/ 「3 日間だけ」(B1-6)、*ba'da wafāṭi 'ummi-him* /ba'da wafāṭØ 'ummi-him/ 「彼らの母親の死後」(B1-12) のように、規範では定義されない /t/ が現れる (cf. Ryding 2005: 35)¹⁸。これは口語諸方言における同源語尾の形態音韻論的ふるまいと並行的であり、例えばカイロ方言 (Mitchell 1978、表記は著者改変) では絶対形 ('absolute state') /-a/ に対し構成形 /-(i)t/ が現れる (e.g., 'iš-širka 「会社」 vs. širkī ṣill 「Shell 社」)。ただし、カイロ方言の数詞ではあらゆる場合に構成形語尾 /t/ は現れないため (e.g., ṭalāt wilād 「3 人の男児」 ṭalāta mallīm 「3 ミリム (貨幣単位)」、規則的に期待される *ṭalātī/*ṭalātī は在証されない)、結果的にこれは「口語風発音」特有の構造だといえる。

3.5 弱変化名詞・形容詞屈折語尾 *-V(-n)*

規範：弱変化 (基底語幹末の子音が /w/, /y/ であるもの) の名詞・形容詞類には、非限定屈折語尾が (i) 主格・属格 *-in*、対格 *-iyan* となるもの、(ii) 全語尾が *-an* であるもの、(iii)

全語尾が *-ā* であるもの、の 3 種が存在する。限定屈折語尾の場合、(i) は主格・属格 *-ī*、対格 *-iya*、(ii)・(iii) は全ての語尾が *-ā* となる。休止形は、(i) は非限定の場合は主格・属格 *-ī* または *-∅*、対格 *-iyā*、限定の場合は全て *-ī*、(ii)・(iii) は限定屈折語尾と同形となる。

口語風発音：教材中には十分な実例がないが、*hādā ḡālīn jiddan* /*hādā ḡālī jiddan*/ 「それはとても高いです」(鷲見編 2019: 40) のように、休止形が文・句末以外でも現れる。前接語に後続する場合は、*'irfa'ū 'aydiya-kum* /*'irfa'ū 'aydiya-kum*/ 「手をあげなさい」(鷲見編 2019: 65) のように休止形は用いられない(ただし、不定の *mā* が後続する例は未見)。教材中には定冠詞が続く実例も見つかっていないが、(i)・(ii) の語尾 *-ī*、*-ā* は定冠詞の直前で短母音化する (Abdelrahman Elsharqawy, p.c.; e.g., *ḡālīn 'al-yawma* /*ḡālī l-yawm*/, **ḡālī l-yawm*/ 「今日は高い」、*fī maqḥan 'al-'āna* /*fī maqḥa l-'ān*/, **fī maqḥā l-'ān*/ 「いま喫茶店に/で」)。なお、これらは規範的には 3.3 と同様、母音挿入により /*ḡālīni l-*/, /*maqḥani l-*/ となる。

3.6 上記以外の語尾

規範：基本的にあらゆる語末短母音は文・句末(休止形)において削除される。

口語風発音：*li-dālika 'aḡhabu 'ilā.../li-dālik∅ 'aḡhab∅ 'ilā...* / 「それゆえ私は…へ行く」(B1-6)、*mašḡulāni dā'iman* /*mašḡulān∅ dā'iman*/ 「二人は常時忙しい」(B1-5)、*min 'ad-darsayni 'ar-rābi' i wa-'al-kāmiṣi* /*mina d-darsayn[ə] r-rābi' wa-l-kāmiṣ*/ 「4・5 課から」(B1-9)、*'amrikiyyūna kaḡūrūna min 'aṣliṣ 'arabiyyin* /*'amrikiyyūn∅ kaḡūrūn∅ min 'aṣl 'arabiyy*/ 「多くのアラブ系アメリカ人」(B1-5)、*hiya tudarrisu 'al-luḡa 'al-'arabiyya* /*hiya tudarris[ə] l-luḡa l-'arabiyya*/ 「彼女はアラビア語を教える」(B1-3)、のように、文・句末か否かに関わらず休止形が用いられる。やや頻度は落ちるようであるが、*ṭiwāla sanawāti d-dirāsati* /*ṭiwāl∅ sanawāt[ə] d-dirāsa*/ 「学生時代を通じて」(B1-8) や *wa-huwa miṭla wālid-ī* /*wa-huwa miṭl∅ wālid-ī*/ 「彼は我父のようなものだ」(B1-12) のように、規範的には文・句末には決して現れない前置詞類も休止形が用いられることがある。なお、アクセント位置については *yajī'u 'ilay-hi* /*yajī'∅ 'ilay-h*/ 「(そこに) やって来る」(B1-10) のように、必ずしも口語方言と同じ位置とはならない (cf. カイロ方言での同源形 *yīgi* 「彼が来る」、Mitchell 1978)。ただし、動詞未完了については、(名詞格語尾の場合と並行的に) 接尾代名詞の前では *yumkinu-nā 'an nashara* /*yumkinu-nā 'an nashar∅*/ 「我々は夜更かしできる」(B1-10)、*kāna dā'iman yusā'idu-nī wa-yatakallamu ma'-ī* /*kāna dā'iman yusā'idu-nī wa-yatakallam∅ ma'-ī*/ 「いつも私を助け、私と話をしてくれた」(B1-12) のように、休止形とはならない。ただし、独立人称代名詞や動詞完了形語尾については、*hal 'anta marīḡun?* /*hal 'anta marīḡ∅*/ 「ご病気ですか」(B1-12)、*'āḡira marratin zurtu fī-hā miṣra* /*'āḡir marra zurṭu fī-hā miṣr*/ (B1-12)、*sāfara li-yadrusa fī 'amrikā* /*sāfara li-yadrus∅ fī 'amrikā*/ 「彼はアメリカに留学に行った」(B1-13) のように完全形が用いられる傾向がある。

4. おわりに

本稿では、正則アラビア語の発音、すなわち個々の分節音(および語アクセント)の調音、および文・句・語境界での音韻調整に関する規範と教育場面の実態を検討した。この上で、旧来の説明や特定の口語方言母語話者による発音について、科学的説明・批判的検討を行わないまま教育場面に実装し続けることについての理論的問題を議論した。

以上の議論では、例えば「ハルツーム市は大きな街だ」をあらわす下記の正則語文について、様々な「発音」方法がありうることが示された。

- (3) *madīnatu 'al-kaṛṭūmi madīnatun kabīratun jiddan* <مدينة الخرطوم مدينة كبيرة جدا>
- a. [madi:natʰu lɣartʰu:mi madi:natʰun kʰabi:ratʰun dʒid:a:]
(調音・音韻調整ともに規範に完全に忠実な実現)
- b. [mædi:nætʰo lɣærtʰu:mi mædi:nætʰon kʰæbi:ratʰon dʒid:ɛn (~ ʒid:ɛn ~ gid:ɛn)]
(カイロ方言母語話者などにとって一般的な朗読としての実現か)
- c. [mædi:nætʰ(ə) lɣærtʰu:m mædi:nɛ kʰæbi:ra dʒid:ɛn (~ ʒid:ɛn ~ gid:ɛn)]
(カイロ方言母語話者などにとって一般的なオーラルな正則語としての実現か)
- d. [madi:natʰ(ə) lɣartʰu:m madi:na kʰabi:ra dʒid:an (~ dʒid:an ~ jid:an)]
(本稿の主張する目標実現)

(3a) は完全に規範に忠実な「発音」方式であり、コーラン朗詠とほぼ同一のものである。この方式は、調音・音韻調整ともに明文の規範に依拠することが可能であり、指導基準の迷いの余地がない点で優れるが、オーラル・コミュニケーションでの使用は恐らく極めて不自然であり、外国語学部としての教育場面には適しにくい。

(3b) は恐らく国内の教育場でデフォルト・スタンダードとして用いられてきた、(カイロ方言などの)「母語話者」の調音に依拠しつつ、全ての語尾を完全形で「発音」する方式である。音韻調整については規範を基準とでき、「母語話者」の発音を録音するなどして提示すればよい点で、教材化が容易である。しかし、(3a) と同様にオーラル・コミュニケーションでの使用は期待しにくく、地域中立的でもない。

(3c) は(カイロ方言などの)「母語話者」が実際にオーラルな正則語で使用すると考えられる、調音・音韻調整ともに規範から逸脱した「発音」方式である。オーラル・コミュニケーションでの使用が容易である反面、地域中立的でなく、(3b) と同様、あたかも正則語に「母語話者」が存在するとの誤った印象を与えかねず、母語話者信仰無批判に再生産、あるいは特定方言の母語話者を不当に絶対視することに繋がる危険性がある。

(3d) は本稿が主張する、人工的かつ混成的な「発音」方式である。音韻調整については(3c)の方式を取り入れることでオーラル・コミュニケーションでの使用が容易となり、調音については(3a)を基準としたことで地域中立的が達成される。人工的であるため、「母語話者」の発音を容易にサンプリングすることはできないが、基本的な調音音声学を習得すれば非母語話者でも明瞭な発音が指導可能であり、正則語には「母語話者」が存在しないことを改めて意識づけ、母語話者信仰を和らげることができる。換言すれば、こうした方法を導入することで、「母語話者」による音声教材を相対化することが可能となる。なお、唯一の定義された調音規範であるタジュウィードを教育的文脈に受け入れるという姿勢は、あくまで「宗教的規範を叩きこむ」という発想とは十分峻別されるものである。

以上より、本稿の提案する発音教育のモデルは、第一に音声実現上明瞭に、かつオーラル・コミュニケーションにおいて自然に通用する発音の習得(外国語教育的意義)、第二にアラビア語の多元性への批判的意識づけ(社会言語学・地域研究的意義)、第三に科学的方法での人間言語の音声の分析(音声学の意義)、そして第四の意義として音声と文字表記

が異なる分析レベルであることへの意識づけ(言語学的意義)を可能にすることを目的としており、単に技能習得に留まらない外国語教育にとって有益な方針であると考え。

参考文献

(日本語文献)

大阪大学(言語文化研究科言語社会専攻)

2019 「高度外国語教育全国配信システムプロジェクト・アラビア語独習コンテンツ 第2版」URL: <http://el.minoh.osaka-u.ac.jp/wl/ar/index.html> (最終閲覧 2020年9月15日)

鷺見 朗子(編)

2019 『例文で学ぶ アラビア語単語集』、大修館書店。

竹田 敏行

2019 『ニューエクスプレスプラス アラビア語』、白水社。

田中 四郎

1963 『アラビア語文典(その1)』、大阪外国語大学アラビア語学研究室室内マナーラ会。

東京外国語大学

2013-2018 「東京外国語大学言語モジュール アラビア語」URL:

<http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/ar/> (最終閲覧 2020年9月19日)

仲尾 周一郎

2018 「周縁アラビア語における喉頭化音—アラビア祖語強調音の再建に向けて」『アラブ・イスラム研究』16、71-92。

2019 「アラビア語教育における「音韻規則」の扱いについて」『外国語教育のフロンティア』2、335-353。

中野 暁雄

1988 「アラビア語諸方言」『言語学大辞典』第1巻、三省堂、472-483。

奴田原 睦明・榮谷 温子

2003 『こうすれば話せる CD アラビア語』、朝日出版社。

Fujii, Shogo (藤井 章吾)

2011 「broadcast reading القراءة الإذاعية (こついで)」manuscript.

本田 孝一

2001 『アラビア語の入門 (CD付)』、白水社。

Mohamed, Hanan Rafik・吉田 昌平

2014 『大学のアラビア語発音教室』、東京外国語大学出版会。

八木 久美子・青山 弘之・イハープ・アハマド・エベード

2013 『大学のアラビア語詳解文法』、東京外国語大学出版会。音声教材 URL:

<http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/ar/gmod/courses/c02/> (最終閲覧 2020年9月19日)

吉田 昌平

1999 「コーラン朗詠学の音韻論」『音韻研究』2、19-26。

(外国語文献)

Abboud, Peter F. and Ernest N. McCarus (eds.)

- 1983 *Elementary Modern Standard Arabic* (3rd ed.), Cambridge University Press, Cambridge.
- 'Abū 'Āṣim 'Abd 'al-'Azīz 'ibn 'Abd 'al-Fattāḥ
1399 (AH) *Qawā'id at-tajwīd 'alā riwāyat Ḥafs 'an 'Āṣim 'ibn 'Abī an-Najūd*, Jāmi'at al-'Islām, al-Madīna al-Munawwara.
- Brustad, Kristen, Mahmoud Al-Batal, Abbas Al-Tonsi
2004 *Al-Kitaab fii Ta'allum Al-'Arabiyya: A Textbook for Beginning Arabic* (Second Edition), Georgetown University Press, Washington, D.C.
- 2010 *Alif Baa: Introduction to Arabic Letters and Sounds* (Third Edition), Georgetown University Press, Washington, D.C.
- Buğday, Korkut
1999 *Osmanisch Lehrbuch*, Harrassowitz Verlag, Wiesbaden.
- Heselwood, B.
1996 "Glottal States and Emphasis in Baghdadi and Cairene Arabic: Synchronic and Diachronic Aspects", *CMEIS Occasional Paper No. 53: Three Topics in Arabic Phonology*, 20-44.
- Islam Today
2013 "Şifāt al-ḥurūf al-hams wa-l-jahr", *Youtube*, URL:
<https://www.youtube.com/watch?v=yiMyUjceps> (最終閲覧 2020 年 9 月 21 日)
- 'Iyād Qazzāz
2016 "'Ashal ṭarīqa li-ṣifāt al-ḥurūf 5 daqā'iq (2)", *Youtube*, URL:
<https://www.youtube.com/watch?v=eeHqNLFwOD8> (最終閲覧 2020 年 9 月 21 日)
- Mitchell, T. F.
1978 *An Introduction to Egyptian Colloquial Arabic*, Oxford University Press, Oxford.
1989 *Pronouncing Arabic 1*, Clarendon Press, Oxford.
- Nakao, Shuichiro
forthcoming "[+Constrict Glottis] Reflexes of *t* and *q* in Contact Situations: Contact-induced change or inheritance?" *Proceedings of AIDA13, Kutaisi, June 10-13, 2019*.
- Nelson, Kristina
2008 "Tajwīd", K. Versteegh et al. (eds.), *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics*, Vol. 4, Leiden: Brill, 425-428.
- Ryding, Karin C.
2005 *A Reference Grammar of Modern Standard Arabic*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Wright, William
1967 *A Grammar of the Arabic Language* (3rd ed.), Cambridge University Press, London.
- Yūsuf al-Ḳalīfa 'Abū Bakr
1994 *'Aṣwāt al-Qur'ān: Kayfa nata'allamu-hā wa-nu'allimu-hā*, Dār al-Markaz al-'Islāmī al-'Afrīqī li-t-Ṭibā', al-Ḳarṭūm.

¹ 逐一明示しないが、本稿では出版物としては 'Abū 'Āṣim (1399AH), Yūsuf (1994) を参照している。近年はオンラインで動画資料 (以下で参照する Islam Today 2013, 'Iyād 2016 等) が多く公開されている。なお、タジュウィードではいわゆる *qalqala* (音節末 /b, j, d, t, q/ の直後でのシューワー挿入)、超長母音、鼻母音化、

/n/ の逆行完全同化、声門閉鎖音前後での超長母音化、などの現象も明示される。ただし、これらは現代語として一般的であるとは明らかにいえないため、本稿での議論の対象とはしない。

² 本稿では *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics* の転写をもとにした表記を用いる。ただし、x (خ) に代えて k を採り、C (任意の子音)、V (任意の母音)、pl (複数形)、. (音節境界)、- (形態素境界)、Ø (ゼロ形式)、* (日文的な形式) の記号を用いる。Mohamed・吉田 (2014) も基本的にはタジュウィードを規範とすると述べているが、記述はやや一貫性を欠く。なお、Mohamed・吉田 (2014) など一部の教材は日本語母語話者の調音特徴として /u/ の平唇音としての調音、母音の無声化、/h/ の環境異音について述べているが、恐らく方言差を反映して、本学での著者の教育経験からは意識的に指導する必要がない場合が多く、(本稿では学習者の前提知識とする) 英語発音教育と共通するテーマであることから、本稿では議論しない。

³ なお、中野 (1988) は「文語では軟口蓋音と記述される例もあるが、方言では [ɣ/ʁ] で示される口蓋垂音であるのがほとんどである」と述べる。著者の経験では、スーダン方言では口蓋垂音として実現する。

⁴ 実際、有声性素性 [+voice] と喉頭狭窄素性 [+constricted glottis] を弁別する言語、例えば朝鮮語・グルジア語・アムハラ語・ハウサ語などの母語話者は、その言語で [-voice, +constructed glottis] に該当する音素(朝鮮語なら濁音、アムハラ語なら放音など)で代替される場合が多い(仲尾 2018; Nakao forthcoming)。

⁵ 著者の経験によれば、スワヒリ語 *shetani* 「悪魔」に対し、スワヒリ語話者のコーラン朗詠では *ṣaytān* [ʃajtwɑːn] のような調音が行われる。アムハラ語話者の例については仲尾 (2018) 参照。

⁶ 奇しくもウルドゥー文字では反り舌音には上付きの <ط> がダイアクリティックとして用いられているが、この調音特徴との関連は現時点では不明である。

⁷ Mohamed・吉田 (2014) も指摘する通り、アラビア語の雅称である「ダードの言語 (*lisān d-dād*)」という表現は、[dʰ(ʰ)] を指していないため、この音をアラビア語に特徴的な音とする説明は適切ではない。

⁸ 定冠詞 /ʾa/ は /j/ 以外の舌頂音の直前で逆行同化する (/j/ は舌頂音と自然類を成さない) というふるまいからは、/j/ の規範的調音を硬口蓋音としたほうが、音韻論的説明が容易である。

⁹ /a/, /ā/ の強い前舌化 (*ʾimāla*) は、それをもつ母方言話者による正則語でも観察されうるが、本稿が採るハフス派のタジュウィードでは極めて周縁的であり、現代の教育上の規範としても採用しない。

¹⁰ 例えば、オスマン語では前舌・後舌母音の対立がアラビア文字正書法では子音の差異であるかのように表記されたが (Bugday 1999)、音韻論的にはオスマン語に「口蓋垂化子音」の存在は認められない。このように、安易に文章表記にとらわれた音韻解釈に陥らない(教育的) 解釈は重要である。なお、トルコ文字によるコーラン章句の転写では、*ʾihdī-nā ṣ-ṣirāṭa l-mustaqīm* <اهدنا الصراط المستقيم> に対して *ihdinessrātel müstakīm* のように、後舌母音は *a, i, u*、前舌母音は *e, i, ü* として転写される傾向がある。

¹¹ これらの接尾辞自体がアクセントをもつことがある (*/kātibú l-kitāb/* 「その本の著者たち」)。なお、カイロ方言母語話者による発音では、次末音節がアクセントをもつことがある (*/kātibú l-kitāb/*, Abdelrahman Elsharqawy, p.c.)。また、こうした発音では、長母音が短母音化 (3.1, 3.2 節参照) しない傾向がある。

¹² 実際には以下で扱う音声教材は恐らくカイロ方言母語話者によるものが大半であり、この方式を唯一かつ広くオーラル・コミュニケーション上使用されるレジスターと認めることは是非は議論の余地がある。ただし、このレジスターは現実にアラブ世界各地で使用される、口語方言と正則語の混合的変種(いわゆる ‘Mixed Arabic’) とは概念上峻別される、あくまで教育上の標準として企図されている。このため、本稿は地域中立性が担保可能かつ簡便なオーラル・コミュニケーションのための新たな正則語の規範として積極的に評価する立場をとる。なお、八木ほか (2018) など、一切の休止形を用いない教材も存在するように、口語風発音を用いないオーラル・コミュニケーションを支持する立場も正当なものである。

¹³ 以下では Brustad et al. (2004) 第一課は (B1-1)、第二課は (B1-2) のように表記する。

¹⁴ 結果的に、子音文字としては表記されない強名詞格語尾 (-V(n))、および動詞未完了形法語尾 (-u/a/Ø) は前接語の直前以外でのみ必ず実現する。つまり、体系としては簡略になっているわけではなく、部分的には規則が増加しているため、より複雑であるともいえる。

¹⁵ この現象は「文頭・句頭以外では挿入されない」とも言い換えられそうだが、実際にはこの挿入音は深層の基底から派生しているため(仲尾 2019)、ここでは一旦挿入されたのち「削除される」と解釈する。

¹⁶ 序数詞(二段変化) *ʾawwal-u* 「第一の」から派生した副詞 *ʾawwal-an* 「第一に」、前置詞 *maʾa* 「と共に」から派生した副詞 *maʾ-an* 「一緒に」などの存在を考えると、記述的には対格とは異なる副詞化接尾辞を認定することができる。この形態素も三段変化非限定対格と同じ休止形をもつ。

¹⁷ ただし、Wright (1967, part 2: 367) は、特に韻文句末での例を挙げつつ、-a/ātVn の休止形が -a/āt となることがあると述べている。現代語についても、Ryding (2005: 23) は /-ā(h)/ だけでなく、/-ā/ も用いられる(e.g., *ḥayātun* /ḥayā(h)/~/ḥayāt/ 「生」、*fatātun* /fatā(h)/~/fatā/ 「娘」と記述している。なお、ペルシャ語におけるアラビア語借用語で -a/ātVn が -a/āt と反映される例は(e.g., *barakat* 「祝福」< *barakatun*, *ḥayāt* 「人生」< *ḥayātun*)、この休止形現象から説明可能であり、ここで述べている構成形とは恐らく無関係である。

¹⁸ なお、*kamsatu ʾilā sittati ʾanfārīn* /kamsatØ ʾilā sittatØ ʾanfār/ 「5~6人」のように、属格名詞の直前以外であっても、構成形であればこの形式は現れる (Abdelrahman Elsharqawy, p.c.)。